

## 「極楽」(菊池寛) 成立の前後

芥川龍之介と The Garden of Epicurus

中 村 友

菊池寛の「極楽」は、大正九(一九二〇)年五月一日の『改造』に掲載された。雑誌の創作欄には、五作が収められており、近松秋江「死の幕の彼方」、武者小路実篤「Cの話」、岩野泡鳴「続おせいの失敗」に続いて、菊池寛の「笑ひ」と「極楽」が、二作並んで置かれている。

「極楽」に対する当時の評価としては、平林初之輔「五月の創作評」(菊池、武者小路、秋江、岩野諸氏の作)<sup>注1</sup>が、〈同氏の「極楽」を読むと(尤も「笑ひ」だつてさうだが)何か読者の度胆を抜いてやらうといふやうな作者の態度——これは悪い意味のじゃない——を観取することが出来る。

「極楽」では実際度胆を抜かれた。極楽を時間と空間との框へはめて易々と描き出した手際に、併し、この作に於ても最後の観念——極楽に倦きて地獄を思ふに至る——を作者があまり大切がつて他の部分を此の観念を際立たせる道具に使つて犠牲にしてつてゐるのは感服出来ない<sup>注2</sup>と発言。水守亀之助の「五月の創作」<sup>注2</sup>は、「笑ひ」に比べると、〈極楽の方は割合に老婆が極楽へ行く迄を力を籠めて書いてあり、結末の「極楽」の無聊退屈なるに失望して未知の「地獄」を憧れると云ふ人間の空疎な理想や飽な

き欲求を諷刺するとても云ふべき企図が自然に出てゐるが、それでも、菊池氏ならではかう易々とは書けないと思はれる大胆さ——悪く云へば無鉄砲さがある<sup>注3</sup>とした。吉田絃二郎の「五月の雑誌から」〔二〕近松、武者小路、菊池氏等<sup>注3</sup>には、「笑ひ」と「極楽」二作を並べて、〈二つとも短いものであるが、ちよつとひりつと刺すやうな味を持つた作品である〉<sup>注3</sup>暗示的といふ点から見れば『極楽』の方がより多く暗示的であるが、作としては『笑ひ』の方がずつとエフエキティブでもあり、実感として直接に訴へるところが多いと思ふ<sup>注4</sup>、同じ吉田の「五月文壇の印象」<sup>注4</sup>には、〈菊池寛氏の「笑ひ」と「極楽」(改造)はいかにも氏のものらしい皮肉さを持つた作品であつて、『極楽』は、〈少し理に落ちたやうな嫌があつたと思ふ〉と記している。佐々木味津三「再考久うして購つた雑誌から——五月月号評」<sup>注5</sup>は、〈「笑ひ」と「極楽」は、氏が提唱してゐる所の凡庸主義を裏書した作品と言つても、過言でない短篇である。その点では、殊に、「極楽」の方が、それに近かつたが、作品の出来栄に於ては、「笑ひ」に、よりおほくの、感銘をうけたところが多々あつた〉<sup>注5</sup>〈凡庸な、主題があまりに軽く取扱はれてあつたやうで、稍々、力の点で、気抜けを感じる嫌があつた〉とした。だが、こうした同時代人評に対し、その直後、同年七月十八日付

けで春陽堂から出版した短篇集『極楽』は、二作を含めて十四の短篇小説を収録し、その単行本の題名に、見たとおり『極楽』をとったということは、この作品に対する菊池の評価が、決して低いものではなかったことを表している。

ところで、「極楽」が、ダンセイニ (Edward John Moreton Drax Plunkett, Lord Dunsany 1878-1957) の影響下にあることは、すでに、片山宏行氏の著『菊池寛の航跡 初期文学精神の展開』に言及がある。<sup>注6</sup>「極楽」は「光の門」のいわば裏返しである。天国を夢見ても、虚無の向こうにはやはり虚無しかなかったという皮肉に対して、極楽には極楽しかなく、楽しみは地獄を空想することだけだという、逆の皮肉を狙ったものである。極楽と天の外、二人の死者、喜悅 (希望) から幻滅へ——両作には明らかに意識的な関連がある」と指摘した。菊池寛の念頭にダンセイニがあったことは、間違いなく、本稿も、まず、この点を踏まえるところから、出発したいと考えている。

ダンセイニの「光の門」、すなわち“The Glittering Gate”は、菊池が愛読した *Five Plays* に収録された戯曲である。本稿では一九一四年に出版された、Grant Richards 版 *Five Plays* (明治学院大学図書館所蔵) を使用するが、原作ばかりではなく、菊池は、当時の翻訳にも目を通していたようだ。

「極楽」が世に出る以前の翻訳としては、大正五 (一九一六) 年十月一日の『六合雑誌』に掲載された、鈴木芳松訳の「煌めく門扉」(ダンセイニ) がある。ただし、目次には、「煌めく扉」(ダンセイニ作) と記された。この訳文が掲載されたのと同じ五年十月一日の『新思潮』に、菊池は「愛蘭土劇手引草 Konouchi doreka hitotsu」を寄せ、ヘロード・ダンセイニ

をとりあげて、〈「黄金亡兆」「輝く入口」等一種異様の世界を現出す<sup>注7</sup>と記した。ところが、翌十一月一日の『新思潮』には「文芸東西往来」を掲載し、へわれら新思潮九月号にて松林みね子女史の筆になるダンセイニ原作「アルギメネス」王の訳文に不満を懐く由一言したるに今亦鈴木芳松なる人ありて六合雑誌十月号にダンセイニ作「煌めく門扉」を訳す。さて／＼困った事なりダンセイニの如き作品を訳するはかゝる作品を全く理解せざることを公告するに等し、たゞ語学上の意味が分るとて翻譯を企つる愚人世に多し、天下の物笑ひなり<sup>注8</sup>とした。へわれら新思潮九月号にて<sup>注9</sup>とあるのは、同誌「校正後」において、菊池が、へ自分は愛蘭土劇を熱愛するものだその中でも、ロード、ダンセイニが好きである。所が八月の三田文学で松村みね子女史がダンセイニの「アルギメネス王」を訳された。読んで幕切れのユーマアが少しも訳されて居ないのに失望した。之はみね子女史の語学が拙いのではなく、とても邦語には訳されないものである。訳し得るものと訳し得ないものととの区別を知り得ることが翻譯者の第一の資格だと、つく／＼感じた<sup>注10</sup>と発言したことを指している。『新思潮』の十月号、十一月号における「寄贈図書雑誌」を見ると、『六合雑誌』の誌名が記されており、鈴木芳松の「煌めく門扉」は、こうした雑誌交換の過程で、菊池の眼に触れたものらしい。

なお、同作を「光の門」と訳したのは松村みね子であり、<sup>注10</sup>『ダンセイニ戯曲全集』に収録された。大正十 (一九二一) 年十一月十四日のことであるが、菊池は松村に請われて序文を認め、中に、〈「光の門」が開かれ、たゞ漠々たる虚空の懸れるが如き<sup>注11</sup>と、書き記している。

では、その“*The Glittering Gate*”はいかなる作品であったのか。

鈴木芳松の「煌めく門扉」を菊池が批判しているの<sup>注12</sup>、まずは、*Five Plays* 収録本文をあげてみる。

SCENE: *A Lonely Place strewn with large black rocks and uncorked beer-bottles, the latter in great profusion. At back is a wall of granite built of great slabs, and in it the gate of heaven. The door is of gold. Below the lonely place is an abyss hung with stars. The rising curtain reveals Jim wearily uncorking a beer-bottle. Then he tilts it slowly and with infinite care. It proves to be empty. Faint and unpleasant laughter is heard off. This action and the accompanying far laughter are repeated continually throughout the play. Corked bottles are discovered lying behind rocks, and more descend constantly, through the air, within reach of Jim. All prove to be empty. Jim uncorks a few bottles.*

右の状況設定は、戯曲の真相を表現しているというべきか。登場する二人の死者のうち、ジムは、生前、少年であったビルに、泥棒稼業を教えた男であった。死んでからはここに来て、ずっとビール罎の口を抜いている。抜いたところで罎は空、ビールは一滴も入っていないのだが、それが分かっている、ジムは、栓抜きを止めることができない。しかし、死んで間もないビルは、まだ自分がおかれた状況に、絶望していない。堅く閉ざさ

れている扉を開けて、門の中に入れば、という期待を持っている。門の向こうには母がいるし、中に入れば、ジムだってシェーンに会える。ビルは生前、盗みに使っていた道具を使い、とうとう、扉を開けてしまった。しかし、そこに現れたのは、*empty night and stars* だけ。*There ain't no heaven, Jim*と、ビルは言うが、幕切れは、*The Curtain falls and the laughter still howls on*に示されているとおりである。

“*The Glittering Gate*”が前述の如くであるとすると、菊池寛が『改造』に掲載した「極楽」<sup>注13</sup>は、どのように構成されているのか。

染物悉皆商近江屋宗兵衛の老母おかんは、先祖代々からの堅い門徒である。先立った夫宗兵衛の後を追って、へ一日も早く、往生の本懐を遂げたいと願い、〈六十七才〉を一期として、現世に別れを告げた。冥土のおかんは、〈ほの／＼とした光明を包んだやうな薄暗〉の中を、距離も時間も分からぬほど歩いて〈極楽の入口〉と思われる大きな門にたどり着いた。〈御仏に手を取られて夫宗兵衛の坐つて居る蓮の台へと導かれた〉のだが、宗兵衛は〈不思議に〉〈余り嬉しさうな顔をしなかつた〉。おかんは、〈幾日も／＼も話して居る中には、大抵の話は尽きてしま／＼い、ようやく、〈極楽の風物を心から楽しまうと〉という気になった。

「ほんとうに極楽ぢや。針で突いたほどの苦しみもない」と、おかんは宗兵衛の方を顧みて云つた。が、宗兵衛は不思議に、何とも答へなかつた。

同じやうな日が、毎日／＼続いた。毎日毎日春のやうな光が、空に溢れて居る。澄み渡つた空を、孔雀や舍利が、美しい翼を広げて舞ひ遊んで居る。娑婆のやうに悲しみも苦しみも起らなかつた。風も吹か

なかつた。雨も降らなかつた蓮華の花の一片が、散るほどの変化も起らなかつた。おかんの心の中の目算では、五年ばかりも蓮の台に坐つて居ただらう。「何時まで坐るんぢやろ。何時まで坐つとるんぢやろ」と、おかんは或日ふと宗兵衛に訊いて見た。それを聴くと宗兵衛は一寸苦い顔をした。「何時までも、何時までも、何時までもぢや」と、宗兵衛は吐き出すやうに云つた。

「そんな事はないぢやらう。十年なり二十年なり坐つて居ると、又別な世界へ行けるのぢやらう。」と、おかんは、腑に落ちないやうに訊き返した。

宗兵衛は苦笑した。

「極楽より外に行くところがあるかい」と、云つたまゝ黙つてしまつた。

おかんも、極楽以上の世界があるとは聞いておらず、たしかにこのまま、極楽に居るより他はない。次第に、有り難みも感激も薄らぎ、へ見るものにも、聞くものにも飽いてしまひ、へものうい倦怠が、おかんの心を喰ひ始めた。そんなへ或日のこと、おかんはふと気が付いたやうに云つた。へ地獄は何んな処かしらん」と。作品の末尾は、次のように結ばれる。

又五年経ち十年経つた。年が経つに連れて、おかんは極楽の凡てに飽いてしまつた。五十年七十年の間、蓮の花片一つ落ちるほどの変化さへなかつた。宗兵衛とも余り話をしなかつた。凡ての話題が、彼等に古くさくなつてしまつたのである。彼等がまだ見た事のない「地獄」の話をする時だけ、彼等は不思議に緊張した。各自の想像力を、極度

に働かせて、血の池や剣の山の有様をいろ／＼に話し合つた。

かうして、二人は同じ蓮の台に、未来永劫坐り続けることであらう。彼等が行けなかつた「地獄」の話をすることをたゞ一つの退屈紛らしとしながら。

“The Glittering Gate” に対し、「極楽」のおかんは、無事、門の内に入り、蓮の台に坐る夫のもとに行き着くことができた。しかし、作品の狙いは、おかんが生前、あれほど信仰して願つた極楽の日々が、ただ倦怠の種へと、化していつてしまふ点におかれている。泥棒が、空っぽのまま振り落ちてくるビール罎に翻弄されて味わう空しさは、へ肝心の極楽へ来て見ると、如何にも苦も悲しみもない、老病生死の危もない、平穩な無事な生活が、永遠に続いて行くのである」という空しさに模様を替え、戯画としての「極楽」が完成する。残された問題は、至福者の不幸せという、着想そのものの転化にあるのであつて、そこには、ダンセイニの他に、もう一つ、菊池寛を刺激した因子が存在すると、見ておくべきであらう。以下は、その点に関する、報告である。

### 三

菊池寛が意識して、共通の話材を取り込もうとした作家に、芥川龍之介がいる。興味深い問題は幾つかあるが、今回は、至福者の不幸の先例に限定して、見ていきたい。その芥川龍之介に、人間以上の力を有する仙人が、自ら凡人に若かずと述懐した短篇小説「仙人」があった。芥川には、同名の作品がある<sup>注14</sup>ので確認すると、大正五（一九一六）年八月一日『新思潮』に掲載された「仙人」が該当し、同じ号には、菊池寛の「閻魔堂」「上田

敏先生の事」が掲載されている。芥川の「仙人」は、当然、菊池寛の視野に入っていたと考えてよいであろう。

「仙人」それ自体については、すでに一度稿をなしている<sup>注15</sup>ので詳しくは触れないが、本稿における問題を確認するために、多少の重複をお許しいただくと、鼠を使って芸をする大道芸人李小二が、見窄らしい老人と出会う。この老人が仙人であって、自分を哀れむ李の前に、雨のように大金を降らせて見せた。別れ際に、仙人が書いたという「四句の語」が、作品の末尾を飾るわけだが、その箇所を以下に引く。初出本文に、小さな印字ミスがあるので、引用は、最新版の『芥川龍之介全集』第一巻を使用した。<sup>注16</sup>

(略) この話を、久しい以前に、何かの本で見た作者は、遺憾ながら、それを、文字通りに記憶してゐない。そこで、大意を支那のものを翻訳したらしい、日本文で書いて、この話の完りに附して置かうと思ふ。但、これは、李小二が、何故、仙にして、乞丐をして歩くかと云ふ事を訊ねた、答なのだからである。

「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに。」  
恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ、苦しい事を、探してあるいてゐたのであらう。

芥川の仙人は、人としては遠く及ばぬ仙力を得、しかもなお自ら敢えて、人の世に乞丐のような姿をして生きる道を選んだわけだが、へ人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに、は、極楽においては再び死

することなく、苦しむこともない境涯に、永遠にあり続けなければならないおかんと宗兵衛の倦怠を想起させるに十分であらう。勿論、芥川龍之介の仙人には、道を究めた認識者の気負いと悲しみが封じられており、おかん宗兵衛と同じだと主張しているわけではない。

問題は、「仙人」の何が、菊池の脳裡を刺激したか、であるが、芥川龍之介が、四句の背後に、ある先行作品を配したことに発していると思われる。「仙人」自体は、全体が多くの作品から材料を得て成立しており、研究史上藤田祐賢氏によって「聊斎志異」<sup>注17</sup>が、大島真木氏によって「聖母の軽業師」<sup>注18</sup>が、清水康次氏によって「橋の下」<sup>注19</sup>が、成瀬哲生氏によって「水滸伝」<sup>注20</sup>が、指摘されている。私見によると、「仙人」末尾における仙人の述懐は、アナトール・フランス (France, Anatole 1844-1924) の *Le Jardin d'Épicure*、日本近代文学館に所蔵されている芥川龍之介の旧蔵書のうち、英訳本 *The Garden of Epicurus* の一節によるものと、推測している。訳者は Alfred Allinson、一九〇八年版であることが記されており、所蔵目録には☆印が付されていて、芥川龍之介自身の書き込みがあることが示されている。同年版で本文を入手することに手間取り、拙稿では従来、大塚幸男訳『エピクロスの園』<sup>注21</sup>によって論じてきたが、今回、英訳本文を確認できたので、欠を補う意味を込めて、必要箇所を引いておく。なお、当時の邦訳としては、和気律次郎訳『エピキュラスの園』がある。国会図書館所蔵本の奥付によると、大正八(一九一九)年十一月廿一日と見える訂正がなされ、天佑社から出版されている。ただ、和気訳は、いささか分かりにくい箇所もあるため、邦語訳としては大塚幸男氏の『エピクロスの園』によりたいと考えている。

I HAVE been reading a book lately, in which a poet and philosopher shows us a race of men exempt from joy, grief, and curiosity. On quitting this new Utopia and coming back to earth, when we look round and see our fellows striving, loving, suffering, how one's heart goes out to them, and how content one is to suffer in sympathy! How surely we realize that here, and here only, is true joy to be found. It springs from suffering, as the healing balm flows from the wounded bark of the kindly tree. They have killed passion, and at one and the same blow slain joy and grief, suffering and pleasure, good, evil, beauty, everything in short, and virtue first and foremost. They are wise, yet they are worthless. For what of worth is attained without effort? What use their life is long if they leave it empty, if they do not live?

The book goes far to make me, on reflection, well content with man's lot, hard as it is, to reconcile me with his painful existence, in a word to renew my esteem for my fellow-creatures and my wide human sympathies. It has another excellence: it fosters our love of reality and enters a caveat against the spirit of vain imaginings and self-deception. By showing us a set of beings exempt from the ills of life, it lets us see for ourselves that these unfortunate favourites of fortune are actually our inferiors, and that it would be the height of folly to exchange (granting such a thing were possible) our own condition for theirs.

「仙人」にあった、へ人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに<sup>注23</sup>は、大塚氏の訳をあてはめると、へ彼らの生涯が長ろうとそれが何だというのか？ 彼らの生涯は空虚であり、彼等は人生を真に生きることはないとするば<sup>注23</sup>へ苦患を免除された人間をわれわれに示して見せることによって、あの本はわれわれに理解させてくれるのである、あの悲しむべき至福者たちは、われわれに匹敵するものではない<sup>注23</sup>ということになる。菊池寛は、仙人が残した言葉の背後にある、*The Garden of Epicurus* を睨みつゝ、<sup>注23</sup>「these unfortunate favourites of fortune」といつのおかん宗兵衛を案出したと、推測しうる。極楽は、菊池寛によってカリカチュアライズされた、<sup>注23</sup>「Utopia」ということであろう。

#### 四

菊池寛が、直にアナトール・フランスに触れた例としては、「極楽」以前の段階でいうと、「批評家の権限」であろうか。大正八（一九一九）年三月一日『新潮』に掲載されたが、小説としては、「無名作家の日記」になる。大正七（一九一八）年七月一日の『中央公論』を飾った作品である。東京を離れて京都の大学生となった<sup>注23</sup>「俺」（富井）は、<sup>注23</sup>「×××」を<sup>注23</sup>はじめた東京の仲間達が、うらやましくてならない。書き上げた「夜の脅威」は、中田博士に読んでもらえず、「×××」の仲間も、掲載をことわってきた。「無名作家の日記」は、知られているように、菊池寛の京都時代、東京の『新思潮』に送った「藤十郎の恋」が、芥川龍之介、久米正雄等によって掲載をことわられた経緯によっており、本来ならば『黒潮』に掲載されるはずであったのが、廃刊で果たされず、丁度、執筆を依頼し

てきた『中央公論』に載ったと、「半自叙伝」<sup>注24</sup>にある。

山野は芥川、桑田は久米を思わせる人物で、二人に苛立ち感情をむき出しにした日記が続くが、最後の日記に、アナトール・フランスをつかった<sup>注25</sup>次の文章が記される。

流行作家！ 新進作家！ 俺は、そんな空虚の名称に憧れて居たのが、此頃では少し恥しい。明治大正の文壇で名作として残るものが、一体幾何あると思ふのだ。俺は、何時かアナトール・フランスの作品を読んで居ると、こんな事を書いてあるのを見出した。

（太陽の熱が、段々冷却すると、地球も従つて冷却し、終には人間が死に絶えてしまふ。が、地中に住んで居る蚯蚓は、案外生き延びるかも知れない。そうするとシエクスピアの戯曲や、ミケロアンゼロの彫刻は蚯蚓に喰はれるかも知れない）。何と云ふ痛快な皮肉だろう。天才の作品だつて何時かは蚯蚓に喰はれるのだ。まして山野なんかの作品は今年もすれば、蚯蚓にだつて喰はれなくなるんだ。

引用では、わずか百余の字数にまとめられてはいるが、菊池はおそらく *The Garden of Epicurus* をもとに<sup>注26</sup>「書き込んでいると思われる。二十六頁〈When the sun goes out, — a catastrophe that is bound to be, — mankind will have long ago disappeared.〉*ポト*〈And the globe will go rolling on, bearing with it through the silent fields of space the ashes of humanity, the poems of Homer and the august remnants of Greek marbles, frozen to its icy surfaces.〉*あふふは*〈For who can tell if another thought will not grow into consciousness of itself, and

this tomb where we all shall sleep become the cradle of a new soul?〉

とあるが、菊池作では、登場する芸術家にズレが生じているし、これに続く〈What soul, I cannot tell. The insect's, perhaps.〉は、蚯蚓と化し、ついに、〈山野なんかの作品は今年もすれば、蚯蚓にだつて喰はれなくなるんだ〉にいたる。しかし、その恣意の程はともかく、菊池が、わざわざ「無名作家の日記」にアナトール・フランスを登場させた背景には、芥川の「野呂松人形」を飾った、例の一節があったからと考えられる。

「野呂松人形」は、大正五（一九一六）年八月一日の『人文』に掲載された。芥川は、作品の末尾に、<sup>注27</sup>〈アナトール・フランスの書いたものに、かう云ふ一節がある、——時代と場所との制限を離れた美は、どこにもない。自分が、或芸術の作品を悦ぶのは、その作品の生活に対する関係を、自分が発見した時に限るのである〉と提示して見せた。田中実氏の「芥川文学研究ノート」① 大正七年十二月の〈作家〉芥川龍之介<sup>注28</sup>は、「野呂松人形」について、〈作品末のこのアナトール・フランスの芸術観こそ、菊池寛が『無名作家の日記』のテーマとし、有名〈作家〉となった山野（芥川）ごときは、蚯蚓にだつて「喰はれなくなるんだ」と浴びせかける契機になったものであった〉と指摘している。

少しこだわると、「野呂松人形」におけるアナトール・フランスは、英訳本 *The Garden of Epicurus* の九二頁〈AS I cannot conceive beauty independent of time and space, I only begin to take pleasure in works of the imagination when I discover their connexion with life; it is the point of junction between the two that fascinates me.〉以下の表現とつながりになる。つまり、菊池寛は、「野呂松人形」が依拠した *The Garden of Epicurus* を踏まえ、芥川とは別の箇所を膨らますかたがて、

「無名作家の日記」に持ち込んだ。「野呂松人形」の、〈僕たちは、時代と場所との制限をうけない美があると信じたがつてゐる。僕たちのためにも僕たちの尊敬する芸術家のために、さう信じて疑ひたくないと思つてゐる。しかし、それが、果してさうありたいばかりでなく、さうある事であらうか。／野呂松人形は。さうある事を否定する如く、木彫の白い顔を、金の歩障の上で、動かしてゐるのである〉<sup>注29</sup>を使いながら、菊池は、時代どころではなく、十年もすれば、蚯蚓にだって喰われなくなる存在として、登場人物山野を切ろうとしたということになる。

確認するが、大正の五年八月という時期に、芥川龍之介は、「野呂松人形」と、先に見た「仙人」を発表した。その二作が、ともに、*The Garden of Epicurus* から借りてきたものであったことを、菊池寛は、しっかりと、見定めていたということになる。

アイルランド文学については、自らさかんに発言して、その影響を語った菊池寛であるが、アナトール・フランスについては、どうであろうか。

「無名作家の日記」に登場する中田博士は、上田敏がモデルと考えられているが、明治期、文壇がアナトール・フランスを移入する際に、大きな役割を果たした人物であった。明治四十（一九〇七）年十一月二十七日、横浜から外遊に上った上田敏は、翌四十一（一九〇八）年十月二十二日神戸へ帰朝。唄脩氏「日本におけるアナトール・フランスについての比較文学的考察―資料を通して見たその移植過程（I）」<sup>注30</sup>は、遊学中の四十一年二月に行われた、アナトール・フランスとの面会に注目し、その移入に関する上田敏の業績を記している。菊池寛が京都帝国大学に身を移すのが大正二（一九一三）年九月。上田敏の研究室にあったアイルランド文学を読みあさって菊池は成長し、本稿で記したダンセイニの“The Glittering

Gate”も、菊池はその過程で読了したのであるが、その上田敏が、アナトール・フランスの理解者であったということだ。菊池が「無名作家の日記」を掲載した『中央公論』に、今度は芥川龍之介が、八年一月号に「あの頃の自分の事」を載せ、「藤十郎の恋」問題に言及。菊池から寄せられた上田敏に関する情報にも言及するが、上田に絡んだ項は、『影燈籠』<sup>注31</sup>収録の際に削除して、今日にいたっている。

明治四十一、四十二年頃からアナトール・フランスの名が知られていく中で、菊池がいつ、読了したとしても、おかしくはない。菊池寛の中にも、芥川龍之介が繰り出してくる、*The Garden of Epicurus* を受け止めながら、さらに、もう一段、切り返してみせるだけのものは蓄積していたことになる。「野呂松人形」を見やりながら、菊池は「無名作家の日記」を書いた。そして、先に記したように、「By showing us a set of beings exempt from the ills of life, it lets us see for ourselves that these unfortunate favourites of fortune are actually our inferiors, and that it would be the height of folly to exchange (granting such a thing were possible) our own condition for theirs」とある。その〈the height of folly〉を、芥川龍之介は、大切なものを棄ててしまった仙人に託し、菊池寛は、極楽往生によって人間らしい暮らしを喪失した夫婦に託して、作品化した。しかし、それだけでは、終わらなかったというべきであろうか。「極楽」が掲載されたのが九年五月。その、二ヶ月後、今度は芥川龍之介が、もう一作をなし、『赤い鳥』に発表した。大正九（一九二〇）年七月一日の「杜子春」が、それにあたる。仙人である鉄冠子は、杜子春に、棄ててはならないもの、人間を棄て去ることの愚かさを教えた。つまり、鉄冠子は、杜子春が人であることを棄てないように、仙人になることを阻止する役割を



担って、作品に登場する。

勿論、「杜子春」が、この一点で成立していると、勘違いしているわけではない。ただ、菊池寛も、芥川龍之介も、彼等のうちに、濃密に交わされる視線が存在し、その視線をお互い、明確に意識し合っていた。「極楽」成立前後の流れも、そうした事例の一つということになろう。

\*漢字は新字体に改めること、圈点、ルビ等は、はずすことを原則とした。

なお、資料閲覧につき、市川浩昭氏のご尽力を賜った。御礼申し上げます。

# 注

- 1 『時事新報』 大正九（一九二〇）年五月五日 十面
- 2 『東京日日新聞』 大正九（一九二〇）年五月十一日 四面
- 3 『読売新聞』 大正九（一九二〇）年五月五日 七面
- 4 『新潮』 大正九（一九二〇）年六月一日 p.110
- 5 『秀才文壇』 大正九（一九二〇）年六月一日 pp.3-4
- 6 平成九（一九九七）年九月二〇日、和泉書院 p.227、なお、『菊池寛のうしろ影』（平成十二（二〇〇〇）年十一月二十日 未知谷）にも、同様の記述がある。

- 7 p.83
- 8 p.72
- 9 大正五年九月一日 p.40
- 10 日付は国会図書館所蔵の奥付によった。警醒社書店。
- 11 p.2
- 12 p.83
- 13 pp.79-86
- 14 『サンデー毎日』 大正十一（一九二二）年四月二日

- 15 『学苑』 昭和六十二（一九八七）年一月一日

- 16 平成七（一九九五）年十一月八日 岩波書店 pp.206-215

- 17 「聊齋志異」の一側面——特に日本文学との関連において——（『慶應義塾創立百年記念論文集』 昭和三十三（一九五八）年十一月一日 慶應義塾大学）

- 18 「芥川龍之介の創作とアナトール・フランス」（『大正文学の比較文学的研究』 昭和四十三（一九六八）年三月三十日 明治書院、のち『日本文学研究資料叢書 芥川龍之介』 昭和四十五（一九七〇）年十月二十日 有精堂）

- 19 『芥川文学の方法と世界』 平成六（一九九四）年四月二十日 和泉書院

- 20 『徳島大学国語国文学』 平成四（一九九二）年三月三十一日

- 21 （岩波文庫） 昭和四十九（一九七四）年九月十七日

- 22 pp.55-56

- 23 pp.50-51

- 24 『文芸春秋』 昭和三（一九二八）年五月一日から四（一九二九）年十二月一日まで連載

- 25 p.69

- 26 pp.26-28

- 27 p.25

- 28 『都留文科大学研究紀要』 平成四（一九九二）年三月一日 p.156

- 29 p.25

- 30 『成城文芸』 昭和三十七（一九六二）年七月三十日

- 31 大正九（一九二〇）年一月廿八日 春陽堂